

サンダル履きまま旅

4

◇ 終身指導者が多い中央アジア ◇

寺井融

Terui Torii

イランからトルクメニスタン
ぬるめのビールで乾杯

イランからトルクメニスタンへの国境で、六、七キロにわたって、ハジトラックが止まっていた。「何日かかるかなあ」

運転手はあきらめ顔である。トルコやイランから満載された輸出品を、ウズベキスタンやキルギスに運ぶ。帰り車では、中国製品を仕入れてくる。陸路物流の最前線なのだ。

彼らは、国境の屋台で腹ごしらえをして、後はただひたすらに順番がくるのを待つ。二十人ほどの団体バス旅行であった私たちの通関は、ものの一時間ほどであっけなく済んだ。

国境を越えても、草原が続く。夕焼けは深く赤い。静かに地平線に落ちて行った。一時間近く走って、人家が見えてきた。第二の都市、マリであった。売店を見つけてトイレを借り、早速、ビール



トルクメニスタンの新婚さん

中心街にあるサンジャインホテルに泊まった。五階建てで、外見は近代的。でも部屋は真つ暗である。スタンドも天井もトイレまでも、電球が切れたままだった。チェンジルームを要求し、替わった部屋でも、スタンドに電球が入っていなかった。天井がついたので、あきらめることにする。

栓がないホテルのバスタブ
広大なフリーマーケット

で乾杯する。
「いやあ、いいですねえ」
「ちよつとぬるめですけどねえ」
酒が飲めて、会話が弾む。女性はスカーフ着用の義務から解放された。ホツとした空気が流れる。自由主義国家にきたような錯覚にとらわれる。
しかし、実際は違う。ソ連邦は解体し、共産主義国家でなくなったとはいえ、強権国家であることに変わりはない。ニヤゾフ大統領は、一九九〇年十月から、死ぬ二〇〇六年十二月まで、大統領であり続けた。〇七年二月に、副首相であったグルバングレイ・ベルデイムハメドフ氏が、選挙で選ばれたが、その得票率はなんと89・23%。
私が訪れた十数年前は、ニヤゾフ体制が全盛の頃である。町のあちこちで、大きな肖像画に出会った。いまは新大統領の絵に、替わっているのだろうか。



マリのフリーマーケット

小物入れが、大人気であった。
ホテルのレストラン棟二階にあった、ディスコクラブにおける若者たちの熱気と、緑地に月と五つ星を白抜きにし、左側には絨毯模様のような紋章が入った国旗に、思い出が深い。

隣国ウズベキスタンへ 日本製は最高級の代名詞

サラクス国境を越えて、お隣のウズベキスタンに入る。肖像画がない分、過ごしやすいい気がした。とはいえ、二〇〇七年十二月にカリモフ大統領が、投票率90・60%を取って、三選を果たしている。反政権派の野党候補は、立候補ができなかった。これにより今後、七年間（通算は二十五年間）、政権を握り続けることとなっている。

ウズベキスタンには、ブハラやサマルカンドなど、国際的に知られた、イスラム色ゆたかな観光地が多い。

そのサマルカンドのレジスタン広場では、モスクに夕陽が映えて、荘嚴の一語であった。ところが、日本の団体観光客は見かけない。午前中に、ガイドとともに見学するからである。ヨーロッパ人は、カプトルでやってきて、ぼんやり夕暮れを楽しんでいた。

首都タシケントは、旧ソ連邦第四の大都市である。地下鉄が走り、市電やバス網も充実している。市立劇場は、旧満州（中国東北三省）から、ソ連



レジスタン広場

軍によって連行された、日本軍兵士によって作られたものである。タシケント大地震でも倒壊せず、「さすが地震国・日本製だね」と言われたそうだ。現地では、日本製が最高級の代名詞である。ちなみに中国製を使うのが庶民で、金持ちには韓国製大金持ちが、はじめて日本製メイドインジャパンを買う。「日本製は、ショーウィンドウに飾って置くものです」と、地元の人に言われた。

中央市場に行くと、朝鮮族のおばあちゃんが、キャベツ（白菜の代用）で漬けたキムチを売っている。彼女らは、シベリアの朝鮮近くの地域から、強制移住させられた人たちである。

バスタブがあったが、栓がない。こんなこともあろうかと、持ってきていたゴルフボールで代用した。鉄さびで、赤茶けたぬるいお湯であったけれど、ここがマリ温泉だと思えば、何ということもない。

面白かったのは、有名観光地のスルタン・サンジャール廟でもなければ、カマダンのモスクでもない。市内中心部で、日曜日ごとに開かれるフリーマーケットである。東京ドームが二つ三つは入る広大な青空スペースに、自動車部品から食料品まで、日常生活にかかわるあらゆるものが売られている。観光客には、古い絨毯地を使った財布とか

キルギス国境はゲートなし 日本語学科もあるビシュケク大学

ウズベキスタンからキルギスの国境は、ゲートがあるわけでもなく、あっけなく越えてしまう。日本でいえば、県境を越える感覚といったらよい。ただし、時々「コントロール」と称して、パトカーがパスポートチェックに現われる。チップ（「ワイロ」）目当てだったりするから、気をつけたほうがよい。

そのキルギスは、かつて「中央アジアで、もっとも民主的な国家」と評価されていた国である。



ビシュケクの広場（5月1日メーデー）

それが、二〇〇五年三月の「民衆」による実行動で、当時のアカエフ大統領が引きずり降ろされた。その後、選ばれたバキエフ大統領は、他の中央アジア諸国と同様に、独裁色を強めてきている。首都のビシュケクは、人口五十万の大都市である。緑の多い、昭和三十年代の札幌市のような雰囲気を持った、落ち着いた町であった。ビシュケク大学には、日本語学科もあるという。

この国には、保養地として有名なイシク・クル湖がある。面積は琵琶湖の九倍。最深約七百メートルの湖には、何も浮かんでおらず、あたりに広告看板の類いも見当たらない。

「玄奘三蔵が訪れた大湖で、彼はそれを大清池とよんでいる。この湖水の脇を通る道もシルクロードの一つであった。漢の王族の娘がこの湖のほとりへ嫁にやらされて、そのみじめな生活に泣き、『願わくば黄鵠となって故郷に帰らむ』と嘆いた」と、深田久弥氏は書いている（『シルクロードの旅』朝日選書）。

ホテルは元共産党幹部保養所 オイルマッサージに満悦

元は共産党幹部の保養所だった、アローラホテルに二泊した。春だったこともあって、ほかのお客は、まるで見かけない。八十キロは優に越えている、ロシア系のオバチャンが仕切っているマッサージ所があった。

マッサージベッドと オイル・マッサージ師



相撲力士のような彼女に「ヘーイ、カモン」と呼ばれる。パンツ一枚にされて、ベッドに寝かされた。オリブオイルをたっぷり掌にひたして、身体をゆっくりもんでくれる。フワッととしてきて、たいそう心地がよい。一時間もんでもらって六ドルは、お値打ち品でしたぞ。部屋では、オールドデイズ・ミュージックがかかっていた。

（この項、続く）

■てらいとある 昭和22年生まれ、46年、中大法卒。雑誌編集者、新聞記者を経て現在、尚美学園大学非常勤講師、ロングステイ財団広報委員、日本旅行作家協会会員。『サンダル履き週末旅行』（竹内書店新社）をはじめとする旅行記のほか、近刊としてエッセイ『裏方物語』（時評社）がある。